昭和57年11月16日国鉄首都特別扱承認新聞紙第809号

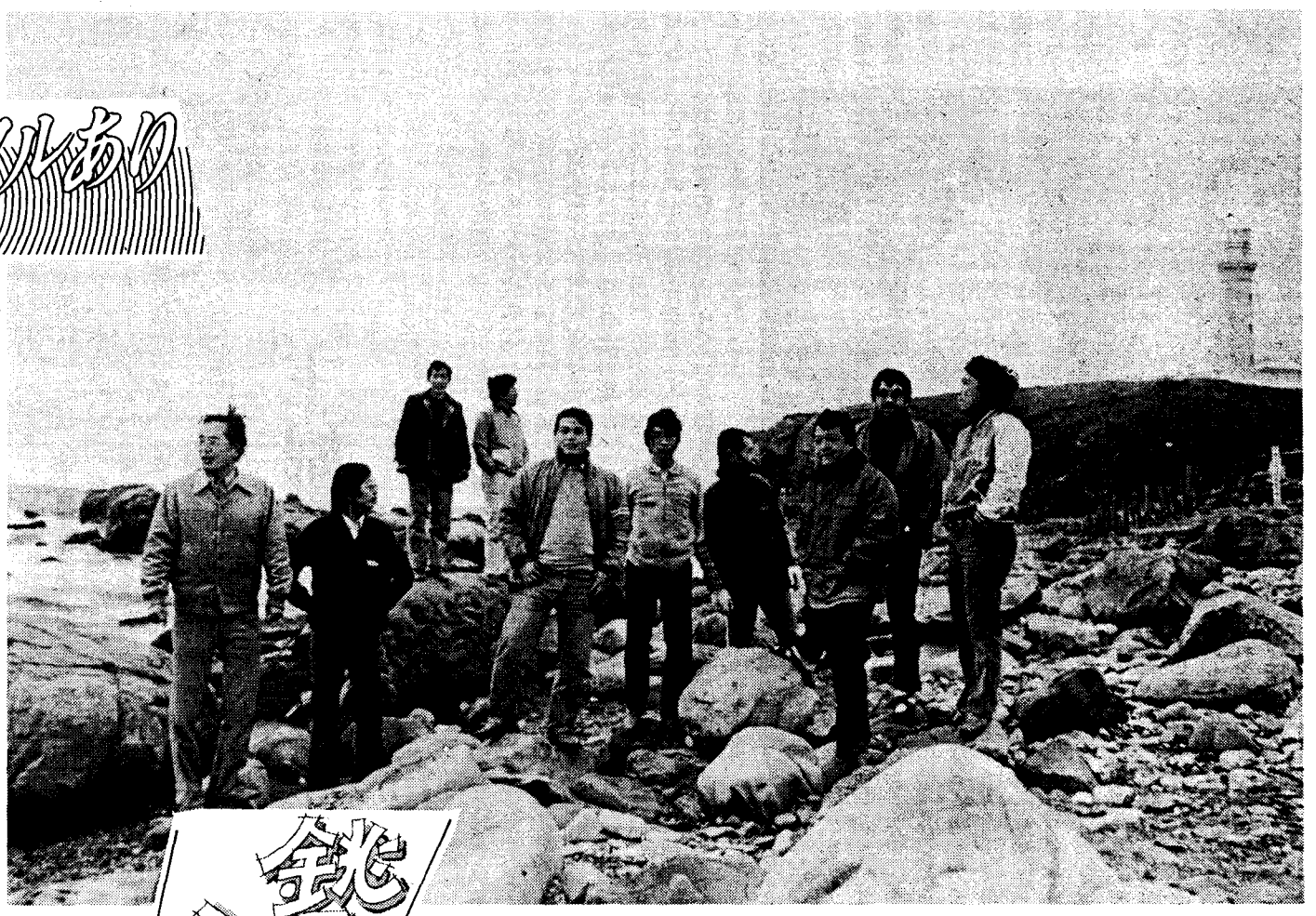
週刊

うたごえ新聞

1/3.10
(1983年)
NO.941

THE SINGING VOICE OF JAPAN
日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行　東京都新宿区大久保 2-16-36
☎03 (209) 0638～9　うたごえ新聞社
振替口座 東京2—5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可　　毎週月曜日発行
1部80円（〒25円）・月330円(〒120円)

ここにサークルあり



犬吠埼の灯台を背に、ここから世界の海へ今日も打電する「銚子無線うたう会」の仲間

銚子無線うたう会

新春訪問取材

海の男たち

南極基地へも交信
犬吠埼からの年賀状

ここは、千葉県の東端にあたる犬吠（いぬぼう）埼。黒潮と親潮のぶつかりあう、流れの激しい太平洋を一望しながら、世界の海へむかって無線を打ちつづける男たち。

に応じて集まってくれたのは「銚子無線うたう会」（長町功代表・32歳）のメンバーです。

日本では、長崎とここだけにしかない、世界中の海と交信をする彼らは、十人の仕事仲間とコーラスを結成し、四年になりました。

一つまちがえば重大な海難事故にも結びつきかねない、緊張の連続の中で、時間をみつけてはうたい交わすハーモニーが、少なからぬ安らぎを生んでいるようでした。

都内だけで二十万、三十万人のお母さんコーラスがあるといわれ、一つの大学には三つも四つも合唱クラブがあるこの国で、南極基地から南太平洋船上を結ぶ無線局に働く仲間のコーラスを紹介できることは、まさに新春にふさわしい。

「いざ起て戦人よ」（グラナハム曲）「進めわが同胞よ」（チェコスロバキア民謡）に、「ソーラン節」や「小さい秋みつけた」などのレパートリーを、男声合唱でうたっている「銚子無線うたう会」です。四年前、電通のうたごえ祭典をキッカケに再開された、と喜ぶ田島雄吾さん(41)らベテランに、武田清春(27)、平井英司(28)さんら若手もがんばっています。

かつての交信では「洋上はるかに、南十字星を仰ぎ—」などといった、この局へならではの年賀電報も多かったといいますが、この十年で五倍も値上がった料金のためか、情緒が失なわれつつあるといいます。

正月も交代で通信をつづける彼ら、そのひととき、海辺に出てシャッターを切る。八三年にかける海の男たち、波のしぶきに溶け込むようです。

（石川道彦記者）

早朝、白いしぶきと寒風が吹き上げてくる海岸に、取材

女性記者の幹事長インタビュー（2面）、ある2つの手紙（3面）、音楽界を占う（4面）野口久光、湯川れい子、関根礼子、伊藤強、'83反核・日本の音楽家たち、ビッグ・ニュース（5面）、北国を走るローカル線、我ら亥年、うたう会用お雑煮（6,7面）、地方版栃木県（8面）、16回総会とうたごえ新聞祭り（9面）、音楽会情報（11面）、歌手登場大橋純子さん（12面）

ふめんだい

どうしてもそこへ行きたかった。函館駅から市電に乗って、坂や教会の多い函館山の裏に、石川啄木の碑があって、海岸一帯に浜木綿（はまゆう）の花が咲いている、と知って。

☆　★　☆

冬の一月か二月だったろうか、横なぐりの雪が都会用の防寒服を突き刺す中、たった一人、真白い海辺と荒れくるう波を見つめ、二時間も立っていた。

☆　★　☆

浜木綿が見たかったのか啄木の足跡を追ってみたかったのか、取材の途ではあったが、どうしても行ってみたかった。

仏桑華（ぶっそうげ）を石榴花（しゃくなげ）とまちがう花オンチなのに。

☆　★　☆

「チョッちゃんが行くわよ」は黒柳徹子さんの、お母さんによる書でベスト・セラーに。

「窓ぎわの——」母親版で、おおらかな教育が語られている。

☆　★　☆

実はこの本を読んでいてアブチロンという花を見つけた著者の喜びが、どこかトットちゃんを育てあげたもの（教育）と共通していて仕方ない。

花と教育は理想を求める人間の性（さが）—。

☆　★　☆

ニューヨークから送られた徹子さんの絵ハガキにあったアブチロンを捜しに捜して、ついに天井に届くほどに育て上げる話は函館の浜木綿を思い出させる（未）